

西播におけるヒロオビミドリシジミの分布に関して

岩 村 巖

現在日本には10科約216種(迷蝶を含む)の蝶が分布することが知られているが、その中には一般に Zephyylus とよばれているミドリシジミのグループがある。ここにいう Zephyylus とは、そよ風という意味だそうで、6～7月にかけて食草の樹上(主としてクヌギ、ブナ、カツワ等のブナ科)に多く見られ、朝な夕な活発に活動し、日あたりのいい木々のこずえを日の光をうけて特有のミドリ色の翅をきらきらかがやかせながら盛んに飛びまわっている姿は実に美しいものである。しかしこの反面、日中はあまり活発に活動せず、樹上に静止していることが多く、したがってこれらの性質を利用して5m以上もあるツナギザオの先にネットをつけ、木々の枝をたたきまわり、おどろいて飛び出すところを採集するのである。

現在日本にはオオミドリシジミをはじめとして、全部で13属23種の Zephyylus が分布していることが知られているが、この中にはヒサマツミドリシジミのように、その個体数が極端に少ないがために、いまだにその生活様式の判明しない種類もある。一般にこれら Zephyylus の中には大変その特徴が近縁種と類似しているものが多く、われわれ蝶を研究しているものにとってはその同定においてまちがいをおかしやすいグループの一つでもある。ここにのべるヒロオビミドリシジミもその例外ではなく、その特徴が近えんのエゾミドリシジミやオオミドリシジミに大変よく似ているがために、今までこれら近縁の種と混同され、ごく最近になってこれら近縁種より分離され新種として記載されたものである。本種は一見エゾミドリシジミにその特徴が似ているが、翅裏面の白帯が巾広く、地色もより明るいこと、また後翅裏面の第1b室の橙色斑は肛角部と第2室の両橙色斑の上部を連絡するのみ(この特徴はどちらかといえば、むしろオオミドリシジミやジョウザンミドリシジミに似ている。原色昆虫大図鑑より)等の点で区別出来る。さらに、またそのいずれもが低地性であるがゆえに必ずといっていいほどヒロオビミドリシジミと同一地方でその姿を見ることが出来るオオミドリシジミとは、翅表外縁の黒帯がオオミドリシジミ程細くならないこと、裏面白帯がより巾広いこと等により一見して区別されるであろう。

本種ヒロオビミドリシジミは現在兵庫県をはじめ、山口県、広島県、岡山県、鳥取県等、西日本全域に広く分

布していることが知られており、本県においても佐用郡久崎町がその産地として古くから有名である。以前より同地方へは、姫路をはじめ神戸、大阪あたりから多数の採集者がおしかけ、さらに最近では遠く名古屋、東京方面からも採集にやって来るようになった。私も毎年1回は必ず同地をおとずれ、本種を採集しているものの1人であるが、ここ2、3年の採集者の激増のせい、その個体数は以前に比べて相当減少してしまったように思われる。ところで本種の県下における分布に関しては、その産地が西部の交通不便の地にかたよっているがために、さらにまた、同地方における同好の志の少ないということも関連して、ほとんど未調査の状態にあるといっても過言ではないように思われる。まだ私が学生であったころ、毎年久崎をおとずれるたびごとに、その途中に展開する山々の様子を見て、時間をかけてたんねんに調査すれば久崎以外にもきっと……と何度思ったか知れない。卒業後、久崎にそう遠くない赤穂(兵庫県立赤穂高等学校)に勤務するようになったのを幸いに、以来近くの山々を歩くチャンスにめぐまれ、現在では注目すべき多産地も2、3判明するにいたったので、一応中間発表の意味で、これまでの記録をまとめて、ここに報告しておく。

1. 船越—海内—水根—青木—上石井

このコースは以前(1959. 6. 13～14)かつての学友であり現在は三菱TRWに勤務しておられる中谷貴寿氏とともに、はじめて蝶をおったコースであり、この時、青木で2♂♂を得たのが最初である。(この事に関しては兵庫生物 Vol. 4, No. 1を参考されたし)。当時2～3mの小さなナラカツワしか存在しなかったこのコースも、ここ1～2年の間にすばらしく成長し、それに比例して本種の個体数も激増したように思われる。現在このコースを時間をかけてたんねんに採集して歩けば、1日に30～40頭は採集出来るであろう。コース中、ナラカツワ林のある所ならどこでも本種の姿を見ることが出来るが、そのうちでも特に海内—水根間の、ゆるいのぼりになった約2kmほどの間と、船越から海内へぬける峠の海内側の傾斜面に多いようである。時期は年によって多少の差はあるが、大体6月中旬～下旬がいいようで、ちょうどこの時期は同地方における田植の最盛期でもある。

1962. 6. 23, 7♂♂, 3♀♀ (Col & poss, I. I.)

1963. 6. 23, 9♂♂, 3♀♀ (Col & poss, I. I.)
1963. 6. 23, 4♂♂, 8♀♀ (Col & poss, K. N.)
1963. 6. 23, 3♂♂, 2♀♀ (Col & poss, K. T.)
1963. 6. 23, 1♂ (Col S. Y. poss I. I.)
1964. 6. 27, 18♀♀, 14♂♂ (Col & poss, I. I.)

なお以上の他にも同時期にこのコースを歩けばウスイロオナガンジミ (6♂♀. I. I., 3♂♀. K. T., 5♂♀. K. N. 以上いずれも1963.6.23採集) ミズイロオナガンジミ (多産)、オオミドリシジミ (やや多産)、ウラジロミドリシジミ (4♀♀, 9♂♂. I. I., 9♀♀, 5♂♂. K. N., 9♀♀, 2♂♂. K. T.) 等にまじって、注目すべきものとしてウスイロヒョウモンモドキ (大山や段ヶ峰、峰山等に産する個体に比べてやや大形であり、高度の関係上発生も以上の地より約10日ほど早い) や、ミスジチョウ (1962.6.23, Col & poss, I. I.) が得られる。

2. 三日月一渋谷一三原一富満一大杉野一野桑

三原から三日月へののぼりは、さしてきつくはないが相当に長く、途中道の両側は松、スギ等の針葉樹が多く、あまり蝶の採集にはむかないようであるが、それでも渋谷部落の登り口と、三原へぬける峠あたりにはカンワを主とした雑木林があり、ここに本種が比較的多産する。

1963. 6. 16, 4♀♀, 7♂♂ (Col & poss, I. I.)
1964. 6. 20, 4♀♀, 2♂♂ (Col & poss, I. I.)

三原から大杉野までの間は、ほとんど尾根ばかりの変化のない道がたんたんとつづき、この地方の山ならどこでもそうであるように、その両側は低いアカマツやクロマツを主とした雑木林となっており、ほとんど見るべきものは得られない。本種ヒロオビミドリシジミのみを採集目的とする場合は、三原からひきかえす方がいいようである。また大杉野から野桑へ下り道には、その中間あたりの左手がやや深い谷になった所に、ごくせまい範囲にわたってカンワ林が出来ており、ここにもわずかではあるが本種の姿をみる事が出来る。

1963. 6. 15, 2♀♀, 5♂♂ (Col & poss, I. I.)
1963. 6. 16, 1♀, 4♂♂ (Col & poss, I. I.)

なお参考までにこのコースで採集された他の Zephyrus をあげてみると次のようなものがある。ミズイロオナガンジミ (51♂♀)、ウラナミアカシジミ (18♀♀、

15♂♂)、ウラジロミドリシジミ (16♂♂, 3♀♀)、オオミドリシジミ (13♂♂, 6♀♀) 以上いずれも6月15～16日の採品。また5月下旬～6月上旬であればウラゴマダラシジミを多数採集出来る。

3. 上石井一奥海一桑村

本コースは1のコースとほとんど同じ場所にあり、ここにヒロオビミドリシジミが産することは十二分に考えられることである。上石井一奥海間には左手にカンワ林が少々あり、ここに Zephyrus が多産する。採集される種類は他の2コースと大差ないが、ヒロオビは1のコースに比べてやや少ないようである。なおこのコースも奥海に近づくにつれて雑木が多くなり、クモガタヒョウモンやメスグロヒョウモンがやたらに目につく以外、Zeph の望みはまずないように思われる。また桑村より船越へぬける道が50,000分の1の地図にははっきり出ているけれども、現在ではほとんど人が通らぬ道であり、さらに途中地図にない間道が相当数あって、始めての人であれば道に迷うことうけあいであるので、桑村から同じコースをひきかえされる事をおすすめする。

1962. 6. 17, 1♀, 9♂♂ (Col & poss, I. I.)

4. 瓜生一三濃山一金出地

本コースにおいてヒロオビミドリシジミが採集出来るのは、瓜生一三濃山ののぼりの前半であるが、個体数は多くない。

1963. 6. 16, 3♀♀, 2♂♂ (Col & poss, I. I.)

現在のところヒロオビミドリシジミが確実に産することが判明したのは大体以上の4コースのみである。何分にも本種の成虫の発生時期がごく限られた短い期間である上に、ちょうどその最盛期が梅雨期と合致しているがために、調査に出かけるチャンスはごくわずかしかなく、過去3年間調査を行なっても、まだその大部分が未調査のままのこされているといったような状態である。今後これらの地域も時間がかかるであろうが、おいおい調査していくつもりである。当地方には多産地久崎とその地理的環境が大変よく類似している所が多く、今後調査が進むにつれてますますその分布範囲は広がるであろう。

なお本文中採集者の項で I. I. とは岩村巖、K. N. とは西垣憲治、K. T. とは滝井邦興の意であり、後者2人は、いずれも県立赤穂高等学校の生徒である。